蘇詩注釈書としての『四河入海』

王　連旺

はじめに

『四河入海[1]』とは天文三年（一五三四）、五山の笑雲清三によって編まれた蘇軾の詩歌に注釈を加えた抄物資料であり、その由来は大岳周崇の『翰苑遺芳』、瑞渓周鳳の『脞説』、万里集九の『天下白』、一韓智翊が桃源瑞仙の講義録を纏めた『一韓聴書』の四書を集め、更に笑雲清三自家の説を加えたものである。

中田祝夫は『抄物大系別刊・四河入海』の「解説[2]」において、『四河入海』の書名の由来、『四河入海』の成立、底本との関係、先行注釈書、諸テキストとの異同、諸本の訓点とその意義、『四河入海』に関する諸学僧の略伝、『四河入海』関係年譜といった各方面にわたる記述がされており、『四河入海』研究の基礎を築いたと言ってよい。

なお、一九七〇年から七二年にかけて、中田祝夫によって整理された訓点付きの『抄物大系別刊・四河入海』全十二冊は、国立国会図書館所蔵の古木活字版、及び岡見正雄・大塚光信編集の訓点・書き込みのない『抄物資料集成[3]』全五巻は、宮内庁書陵部所蔵の古木活字版[4]のリプリント版として著名である。日本語史研究者の整理によって、一九七〇年代最初の段階で多くの研究者が利用できるようになった。今では更に、国立国家図書館所蔵の古木活字版『四河入海』がデジタル化され、広く見られるようになった。

『四河入海』の本文、及び注釈には多くの訓点が付されており、室町時代の口語で解説した部分も多数あること

から、従来の研究では、中世日本語研究において重要な資料として利用されてきた。一方で、蘇詩注釈書としての『四河入海』の研究に関しては、まだまだ検討の余地があると考えられる。たとえば一九六五年、小川環樹・倉田淳之助両氏が『翰苑遺芳』から散逸した南宋の趙次公注、施注を輯佚しており、これは二十世紀の蘇詩研究史における重要な成果であろう。しかしながら『翰苑遺芳』以外の三書にあっても、趙次公注は残されており、『四河入海』の輯佚作業はまだまだ全面的とは言い難い。小川環樹・山本和義の『蘇東坡詩集』は、『四河入海』の注釈を多く参照しているが、それも合注本全五十巻のうち、十六巻までしか完成していない。なお、中国における『四河入海』に関する研究は一九八〇年代から始まったものの、いまだに書誌紹介の段階に止まっており、『四河入海』自体に関する研究があまりみられないのが現状である。

本稿は、中国と日本とにおける蘇詩批評の流れを踏まえた上で、『四河入海』の体例、特色について分析する。

一　蘇詩注釈の流れにおける『四河入海』

蘇軾（一〇三七～一一〇一）、字は子瞻、号は東坡居士。眉州眉山（四川省眉山市）の人。蘇軾の別集には、『銭塘集』、『超然集』、『黄楼集』、『東坡集』など、また『南行集』（蘇洵親子三人の詩歌総集）などがある。それらは蘇軾の生きているうちに既に刊行され、一世を風靡し、今なお二八〇〇首以上が現存している。

現存する最も古い蘇詩のテキストは所謂『東坡七集』であり、詩の大部分は、『東坡集』（全四十巻）の巻一から巻十九冒頭、『東坡後集』（全二十巻）の巻一から巻八冒頭、『和陶集』四巻に収録されている。これらの詩集には、若干蘇軾の自注があるものの、ほかの注釈は付されていない。後世においては蘇詩に対する注釈は中国のみならず、

日本を含めて漢字文化圏において広く行われてきた。

五山時代というのは、漢学が盛んに行われた時代であった。この時期に数多くの蘇詩講義録が出てきた。例えば、大岳周崇（一三四五～一四二三）の『翰苑遺芳』、厳中周噩（一三五九～一四二八）の『東坡詩抄』（散逸）、惟肖得厳（一三六〇～一四三七）の『東坡詩抄』（散逸）、江西龍派（？～一四四六）の『続翠』（散逸）（『天馬玉津抹』とも言う）、瑞渓周鳳（一三九一～一四七三）の『脞説』、万里集九（一四二八～一五〇七）の『天下白』、一韓智翊が師匠の桃源瑞仙（一四三〇～一四八九）の講義を記録して編んだ『一韓聴書』（『一韓聞書』、『一韓翁聴書』、『蕉雨餘滴』とも言う）などが挙げられる。これらの講義録は『四河入海』の成書の基礎を築いた。

次に、中国における蘇詩注釈の流れを辿りつつ、『四河入海』は独立した日本の蘇詩注釈書ではなく、大きく中国の旧王本と施注本の二つの系統に基づくものであることを論じてみる。

蘇詩に対する注釈は、中国においては、北宋から南宋における李厚、程縯、宋援、趙次公らの所謂「四家注」から始まる。また、南宋に至っては、五家注、八家注、十家注に発展し、その集大成ともいえるのが、南宋の王十朋の名を冠する『王状元集百家注分類東坡先生詩』である。この注釈書は、詩歌の主題によって七十八の門類に分けており、「百家注」「類注」、或いは「旧王本」などと呼ばれる。五山禅僧たちの蘇詩講義に用いられた底本も「旧王本」に基づいており、現行の「旧王本」では散逸している趙次公の注釈を今に伝えている[7]。

また、「旧王本」とほぼ同時代の注釈書がもう一つある。それは南宋嘉定六年（一二一三）に淮東（揚州市）で施元之、顧禧、施宿らによって刊行された『注東坡先生詩』であり、その注釈は、施注、或いは施顧注と呼ばれている。この注釈本は、日本では『四河入海』所収の『翰苑遺芳』に多く引用されており、陳振孫の『直斎書録解題』、馬端臨の『文献通考・経籍考』に著録されてはいるが、稀覯書として知られていた。清代に至って邵長蘅ら

が宋刊『施顧注蘇詩』残本に補注をつけて刊行している。[8]

以上をみてみると、日本で編まれた『四河入海』は、先行する中国の「旧王本」と施注本といった重要な蘇詩批評を継承している注釈書であることが認められよう。

さて、『四河入海』の底本は、旧王本直系の劉辰翁（一二三一～一二九四）評批点本・全二十五巻である。第一巻を「巻一之一」から「巻一之四」のように一巻を四冊に分けており、全百冊にも達する膨大な蘇詩注釈書である。冊ごとの初出の注釈は、「翰苑遺芳云」「脞説云」「天下白云」「一韓聴書云」のように提示し、一度注釈に用いてからは、「芳云」「脞云」「白云」「一云」のように略称で提示する。また、笑雲清三の注釈や案語は、「三云」、或いは「三私云」で提示して行間、或いは枠外に書き込まれる場合もある。その注釈について、さらに詩歌ごとに厳密にみてみると、題注・作品の構造分析・詩語や詩句の解説・校勘・詩歌全体に対する総評の五つの部分からなっている。この点について実例に即して考察を加えていくことにしよう。

二　『四河入海』の構造

①　題注

題注は題下注とも言い、詩歌の題目、或いは詩歌の創作時期、場所、人物などについて注釈を付け加えることであり、作品の理解に非常に重要な役割を果たしている。これに近い性質を持っているのは詩人自身の詩序に当たるものと考えられる。宋人のなかで蘇詩題注を詳しく付けたのは南宋の施宿であり、『四河入海』の題注はそれを継承しながら一層発展させている。

また、詩歌に関する時間・空間・人物・故事などを考証する際、最も参考になるのは詩人の年譜である。施宿の蘇詩題注が好評を得ているのは、『国史』によって詳しい年譜を作成し、それを参照しつつ、題注を付けたからであろう。五山禅僧は施注を重要な資料として扱っており、題注を付け加える場合に、年譜を重視する点では施宿と一致している。『四河入海』の題注には、施宿の『東坡先生年譜』、何掄の『三蘇年譜』、傅藻の『仙渓紀年録』の引用が頻繁にみられる。巻一の三の「十月二日初到恵州。」の題注を見てみよう。

白云、『仙渓紀年録』云、「紹聖元年甲戌、先生五十九、十月二日到恵州、與此題同」。『施宿年譜』記十月不記日、何掄『三蘇年譜』云、十月三日到恵州、與王十朋題下注同。有兩説、故並録之。

一云、實ニ紹聖元年十月三日デアルゾ。

このように『四河入海』の題注は、概ね三種類の年譜を用いており、『仙渓紀年録』の「十月二日」、『施宿年譜』の「記十月不記日」、『三蘇年譜』の「十月三日」といった異説を併記する。また、五山禅僧の見解もしばしば述べられている。さきに引用した詩と同時期に制作された巻五の四の「遊博羅香積寺並引。」の題注を見てみよう。

『翰苑遺芳』云、恵州作。

『天下白』云、紹聖元年甲戌十月二日到恵州、『三蘇年譜』作十月三日、恐傳寫誤欤。此詩紹聖三年丙子先生六十一、春之作也。

万里集九は「十月二日初到恵州」の題注と同じように異説を並べ挙げ、更には「遊博羅香積寺並引」の題注においては、異同の理由について「恐傳寫誤欤。此詩紹聖三年丙子先生六十一、春之作也」と自身の見解を述べている。なお、人物に関する注釈として引用されるのは、十三経、正史のほか、『東都事略』『言行録』『続資治通鑑長編』『宋元通鑑』などが頻繁に見られる。

また、地名・楼閣・史跡といった場所の注釈は、『翰墨全書』『方輿勝覧』『太平御覧』『杭州図経』『咸淳臨安志』などに拠っており、中国の地理に対する関心が非常に高いことが窺える。「望湖亭[三]」を挙げてみてみよう。

八月渡長湖　八月　長湖を渡る
蕭條萬象疏　蕭條　万象疏なり
秋風片帆急　秋風　片帆急ぎ
暮靄一山孤　暮靄　一山孤なり
許國心猶在　国に許して心猶お在り
康時術已虚　時を康くす　術已に虚し
岷峨家萬里　岷峨の家　万里
投老得歸無　投老　帰るを得るや無や

蘇軾は多くの地域で活動したため、彼の詩に現れる望湖亭が一体どこを指すかを明らかにするには考証が必要である。『四河入海』の重要な参考資料となる南宋期の注釈には、一切指示されていないため、五山禅僧たちはこの点

を明らかにする試みを行った。まず、『天下白』の注釈を引用する。

『續翠』云、不知何處。雖杭州有望湖望海之名、皆樓而非亭。『勝覧』等亦不載之。襄陽亦有望海亭、無望湖亭。焦雪、北禪[12]亦不記何處。

万里集九は江西龍派の『続翠』を引用して、「『続翠』に云う、何処知らず」と判断し、また「杭州に望湖、望海の名有るも、皆楼にして、亭に非ず。『勝覧』等亦た之を載せず。襄陽に亦た望海亭有るも、望湖亭無し。蕉雪、北禪も亦た何れの処にあるかを記さず」と分析している。この注釈を見てみると、万里集九の意識では、「望湖亭」が杭州に位置するものと推測しているが、『方輿勝覧』などの地方志には記載されていないことを述べており、問題点を提示するに止めている。一方で、『一韓聴書』は「此望湖亭ハ在湖州道場山ト云ゾ」と注しているが、根拠は示されていない。なお、清の査慎行に拠ると、この望湖亭は南康の呉城山にあり、湖は重湖でることが考証されている。査注[13]を見てみよう。

『江西志』、「南昌呉城驛、有呉城山、山有望湖亭」。周煇『清波雑志』、「紹興辛酉、煇隨侍之鄱陽、至南康揚瀾左蠡失舟、老幼僅以身免。小泊沙際候易舟、信步至山椒一寺、軒名重湖、梁間一木牌、乃蘇内翰留題、登榻觀之、即「八月渡重湖」云云。」(『江西志』、「南昌の呉城驛に、呉城山有り、山に望湖亭有り」、と。周煇の『清波雑志』に、「紹興辛酉、煇、侍して随いて鄱陽に之かんとし、南康に至る。揚瀾左蠡、船を失い、老幼、僅かに身を以て免る。砂際に小泊し、船を易えるを候ち、歩に信かせて山椒の一寺に至る。軒「重湖」なる名

あり。梁間の一木牌、乃ち蘇内翰の留題なり。榻に登りて之を観、即ち「八月重湖を渡る」云々」、と)。

査注に従えば、五山禅僧の考証は誤りであるが、「杭州に望湖、望海の名有るも、皆楼なり、亭に非ず」と述べており、少なくとも「望湖楼」「望海楼」の存在を肯定し、「望湖亭」などの存在をきっぱりと否定していることから、注釈者の杭州に対する地理認識の高さが認められよう。

②　作品の構造分析

詩歌の注釈は、概ね典拠や字句の解説を重んじており、作品全体を評価する場合には、批点、或いは詩話の形式を用いることが多い。しかし、『四河入海』に引用される趙次公の注釈において一部の作品には、内容によって段落を分ける形式を採っていることは、瑞渓周鳳は「刻楮子瑞渓脞説叙」において、「長篇分段蓋擬趙次公杜詩之解也」と述べている通りであろう。それと同じように五山禅僧らは趙次公の注釈のあり方を継承して、この形式を普遍的に用いている。たとえば絶句といった短詩の場合は、作品全体に対して分析を加え、律詩と古詩の場合は、詩歌の内容によって幾つかの部分に分けて説明を加える傾向がみられる。「懐西湖寄晁美叔同年[注三]」を例として見てみよう。

西湖天下景　西湖は天下の景
游者無愚賢　遊者　愚賢と無く

淺深隨所得　淺深得る所に随う
誰能識其全　誰か能く其の全を識らん
嗟我本狂直　嗟　我れ本と狂直
早爲世所捐　早に世の捐つる所と為る
獨專山水樂　独り山水の楽しみを専らにす
付與寧非天　付与すること寧ろ天に非ざらんか
三百六十寺　三百六十の寺
幽尋遂窮年　幽尋して遂に歳を窮む
所至得其妙　至る所　其の妙を得るも
心知口難傳　心に知りて　口　伝え難し
至今清夜夢　今に至るまで清夜の夢
耳目餘芳鮮　耳目　芳鮮を餘す
君持使者節　君は使者の節を持し
風采爍雲煙　風采　雲煙を爍さん
清流與碧巘　清流と碧巘と
安肯爲君妍　安くんぞ肯えて君が妍ならん
胡不屏騎從　胡ぞ騎從を屏けて
暫借僧榻眠　暫く僧榻を借りて眠らざる

讀我壁間詩　我が壁間の詩を読まば
清涼洗煩煎　清涼煩煎を洗わん
策杖無道路　杖を策きて道路と無く
直造意所便　直ちに意の便とする所に造れ
應逢古漁父　応に古の漁夫に逢うべし
葦間自寅緣　葦間に自ら寅緣す
問道若有得　道を問うて若し得る有らば
買魚勿論錢　魚を買いて銭を論ずる勿れ

この「懐西湖寄晁美叔同年」詩は、蘇軾が密州の任にあった時期の作品である。蘇軾は晁美叔とともに、嘉佑二年（一〇五七）及第の進士の同年であることを題しており、両者の交遊は親密なものであった。

さて、万里集九は詩歌全体の構成について、「白云、三段、起句下四句一段、「嗟」下十句一段、「君」下十四句一段」と分析している。それに即していえば、一段落目では、西湖の美しい風景を描写しており、二段落目では、杭州通判を勤めた時期に日々山水を楽しみ、今になってもその新鮮さを覚えていることをうたい、三段落目において、自分の生活方式を親友の晁美叔に薦め、山水趣味を強調しながらうたっている。

桃源瑞仙は、自身の憧憬として一段落目の西湖の風景について次のように述べている。

一韓聞書云、西（湖天下景）　天下ノ景ニ杭州ノ西湖ホド面白処ハナイゾ。サル程ニ、愚ト無ク賢ト無ク遊

バヌ者ハナイゾ。今、在京ノ者ニ清水寺エマイラヌモノナイ類ゾ。サル程ニ、イカナ者モ西湖ニ遊ゾ。其ノ境致ノ浅処ヲモ、深処ヲモ、各々、人々ノコノミミテ遊テ見テ、トルゾ。誰デマリ[15]、境致ノ浅深トモニ、ズットヲ、全ク識ル人ハナイゾ。此詩ハ、坡密州ニ在リ杭州ノ事ヲ思テ寄スル詩ナレバ、カウ云ゾ。

桃源瑞仙は、無論杭州に訪れた経験は無いが、清水寺と西湖とを類比しながら、西湖周辺の風景、更には遊覧する人々の様子を想起している。しかも、この想像は単なる表層的な比較ではなく、両者の本質的な共通点として指摘している。即ち第一・二句の「西湖天下景、游者無愚賢」において、天下一の風景であっても、愚者も遊べば賢者も遊ぶことをうたい、また、「淺深隨所得、誰能識其全」とそれがどれほどすばらしいものかは見る者次第、すべてを知り尽くせる人はあり得ないとうたっているのに対して、杭州の西湖に広がる風景と日本の京都の清水寺を結び付けることで、日本の読み手に親近感を与えるような主体的な態度で解していたのである。

③ 校勘

南宋の邵博は『聞見後録』において、「蘇仲虎言、有以澄心紙求東坡書者。令仲虎取京師印本「東坡集」誦其中詩、即書之、至「邊城歳莫多風雪、強壓香醪與君別」、東坡閣筆怒目仲虎云、汝便道香醪。仲虎驚懼、久之、方覺印本誤以「春醪」爲「香醪」也[16]」と記述している。「邊城歳莫多風雪、強壓香醪與君別」は「送曾仲錫通判如京師[17]」の中の二句である。この記述からみれば、蘇軾の詩歌は彼が生きていた時期にすでに文字の異同が出てきた。従って、南宋の注釈者は蘇詩の校勘に苦心していた。例えば、施注本は墨蹟や石刻資料を多く用いており、優れた

校勘作業を加えた[18]。

南宋の注釈者と同様に、五山禅僧も校勘を重視している。『四河入海』は幅広い校勘材料を用いている。一次資料として宋刊『東坡集[19]』『東坡文集[20]』『大全集[21]』『東坡別集[22]』『烏台詩案[23]』などを用いていた以外、宋元刊の注釈書も多く参照している。旧王本系統のテキストの場合、宋刊旧王本を「無批語本[24]」「無批語唐本[25]」、元版劉辰翁批点本を「増刊本[26]」「批語本[27]」、日本五山版を「和本[28]」「日本本[29]」「日本版[30]」と略称している。宋刊施顧本を「施本[31]」或いは「顧本」「顧氏本[32]」と呼ぶ。また、中国より伝わってきた新しいテキストを「新度唐本[33]」「新渡増刊本[34]」と称する。

一方、中国においては、あまり校勘に採用しない地方志や詩話なども用いている。筆者の初歩的な統計によれば、『叢林盛事[35]』『事文類聚[36]』『事文類聚続集[37]』『漁隠叢話[38]』『方輿勝覧[39]』『冷斎夜話[40]』『詩学大成[41]』『東京夢華録[42]』などを用いている。

『四河入海』の校勘資料は幅が広く、量が多い。また、旧王本に収録されなかった趙次公の校勘を引用している。先に引用した「懐西湖寄晁美叔同年」詩第二十六句「葦間自寅縁」の「寅縁」を例として見てみよう。「寅縁」は、施本では「延縁」、旧王本、集本では「寅縁」と作っている。『天下白』は趙次公注を引用して二字の相違の発生と理由を述べた。

白云注、某謂此注、也曰「等字」。與『莊子』不同、詳見於「漁父篇」。「延縁」「寅縁」同意、故先生用之。次公注云、莊子作「延縁」、今先生作「寅縁」、應誤云云。**文選ノ形読延縁ト、シリゾキ、カエッテ、**『莊子』同意。（白云の注に、某 此の注を謂い、また「等字」と曰う。『莊子』と同じくせず、詳らかに「漁父篇」に

見ゆ。「延縁」「寅縁」は意を同じくす。故に先生は之を用いる。次公注に云う、『荘子』に「延縁」に作り、今先生は「寅縁」に作る。応に誤りなるべし、云々。文選ノ形読に延縁ト、シリゾキ、カエッテ、『荘子』の意と同じ)。

『天下白』に引用された趙次公注は旧王本に見えない所謂佚趙次公注である。万里集九は「等字」の概念を以て趙次公の注釈を訂正した上で、いわゆる文選読みを用いて、「寅縁」の意味を「退き、帰って」と通俗的に解釈している。

『四河入海』には、詩の本文に対する校勘だけでなく、注釈までも校勘を行う場合もよくある。「坐上復借韻送岢嵐軍通判葉朝奉」詩の第一句「雲間踏白看纏旗」の「踏白」の注釈に対する校勘を例として見てみよう。まず、異同のある注釈を「軍中有白馬、**過**行師、以為先驅」「軍中有白馬、**遇**行師、以為先驅」それぞれ並べ挙げて、「和本並増刊校正本又無批語本等皆作「過」字、新渡増刊本部必有作「遇」字、北禅已見之、故云「遇」可也」と四種類のテキストを比較して校勘作業を行っている。

④ 詩語や詩句の注釈

詩語、詩句の注釈における引書資料の傾向について検討を加えていく。たとえば詩句に対する訓詁や典故、或いは地名、建築物、人物の考証には、旧王本や施注本を参照する以外にも、『文選』『唐文粹』といった総集類、『翰墨全書』『事文類聚外集』『詩学大成』『古今源流至論』といった類書、『続資治通鑑長編』『宋元通鑑』といった宋

注には用いられていない史書、『容斎随筆』『清波雑志』『雲臥紀談』『東京夢華録』といった宋人の筆記、『苕渓漁隠叢話』『詩人玉屑』『臨漢隠居詩話』『石林詩話』『西清詩話』といった詩話、『百川学海』といった叢書、『大全本草』といった医書、『釈氏資鑑』『五灯会元』といった仏教内典、『荊楚歳時記』『歳華記麗』『建安茶記』といった風土に関する書籍、『広韻』『方言』『爾雅』といった字書などを幅広く引用している。『四河入海』所収の四書のうち、とりわけ『天下白』の引書はほかの三書と比べて比較的に量が多く、幅が広い。これは万里集九の序文においても述べられている。

芳・脞・翠之三部、□廼坡集之日月星也。凡好學者而孰不借其餘光。故彌綸夏夷之間、今不悉錄也。□三大老、若有異說則舉「某謂」之二字以判矣。加之、史傳、小說、詩話、圖經、大梵之悉曇、扶桑之假名有益于本集而三大老不載者件件纂焉（『翰苑遺芳』『脞説』『続翠』の三書というのは、まるで東坡詩集の太陽・月・星のようである。全て学問を好む者においてその恩恵に与らない人はいない。これらの三書は広く中国・日本のものにわたるものでるが、今そのすべては採用することをしない。三人の大家において、もし異説があれば、私は「某、謂えらく」（「某謂」）の二字を挙げて、私の判断を示すこととする。また、史伝・小説・詩話・図経・悉曇資料、及び日本の資料のうちで本書（『天下白』）に益があるもので、三書の大家が採用していなければ、本書は全て採用することにする[注三]）。

万里集九の序文を見れば、『四河入海』がこのように膨大な資料を用いていることにも首肯し得る。次に、「飲湖上初晴後雨[注四]」詩二首の其二を例として詩語と詩句の注釈を見てみよう。

水光瀲灩晴方好　水光　瀲灩として　晴れて方に好し
山色空濛雨亦奇　山色　空濛として　雨も亦奇なり
欲把西湖比西子　西湖を把って西子に比せんと欲すれば
淡妝濃抹總相宜　淡粧　濃抹　総べて相宜し

これは「西湖」をうたったもので、「西子湖」の名称は即ちこの詩に由来している。蘇軾はその後また三首の詩歌の中でこの比喩を用いている。

西湖真**西子**　西湖は真の西子
烟樹點眉目　煙樹　眉目を点す
「次韻劉景文登介亭」（巻三十二）

祇有西湖似**西子**　祇西湖の西子に似たる有り
故應宛轉爲君容　故に応に宛転君が為に容づくるべし
「次前韻答馬忠玉」（巻三十三）

西湖雖小亦**西子**　西湖　小と雖も　亦た西子
縈流作態清而丰　縈流　態を作し　清にして丰
「再次韻德麟新開西湖」（巻三十五）

それでは、「西子」を巡る諸テキストの注釈を見てみよう。まず、「飲湖上初晴後雨」詩における旧王本の趙次公注は、「先生詩又云「只有西湖似西子」（先生の詩に又言う、「只西湖の西子に似たる有り」）」とある。旧王本所引の趙次公注は「次前韻答馬忠玉」の用例を指摘するのみであり、王本に至ってはこの趙次公注を省いている。しかし、『翰苑遺芳』や『天下白』に引用される「飲湖上初晴後雨」詩に対する趙次公注では、「次公注云、此先生新意新句也、「故應宛轉爲君容」、蓋自其今之語、爲故事也（次公注に云う、此れ、先生の新意、新句なり、「故に応に宛転君が為に容づくるべし」、蓋し其の今の語に自りて、故事と為すなり）」とある通り、両書に引用される趙次公注はほかのテキストに見られない。従って、両書に見える趙次公注は、諸注本よりも詳細であることは明らかであろう。

⑤　詩歌全体に対する総評

詩語や詩句の個別解釈は部分的な理解である。それに対して、作品全体を分析・評価するという方法も『四河入海』が用いている。その担い手は主に『一韓聴書』である。さきに挙げた「飲湖上初晴後雨」詩の注釈の最後に付されている『一韓聴書』の総評を見てみよう。

「水光（瀲灩晴方好）」云ハ、西湖に遊トキ、始メハ晴テ、西湖ノ水光ガ瀲灩シタガ、ナニトモ、面白ガ、エイ。又、アソコニハ、雨ガフルガ、ヤラウ。山色ガ空濛トシタガ、ナヲ、面白ゾ。雨ガフライテハ、サテゾ。

コノ二句ハ、影略互見セヨゾ。「欲（把西湖比西子）」、サル程ニ、此ノ西湖ヲバ、西子ニ可比ゾ。ナゼニト云ヘバ、西子ハ、天然美人ナレバ、淡妝濃抹ガ、西湖ト似タ程ニゾ。西子天然ノ美人ナレバ、淡妝ノウスケハイノ時モウツクシク、又、濃抹ノコイ妝ノ時モウツクシイゾ。サル程ニ、西湖ノ面ノ、雨フルモ、晴モヨイガ如ナゾ。是ガ坡ガ新意ゾ。

『一韓聴書』の総評は諸家の注釈を踏まえつつ、分かりやすい言葉で一句ずつ説明し、詩歌全体の意味を解説した上で、自身の判断を示している。また、異説がある場合には、『四河入海』に所収の他の注釈の得失についても分析を加えている。特に、総評の最後に「是ガ坡ガ新意ゾ」と強調して、この作品の最も優れたところを説き出している。

三　『四河入海』の注釈の特色

中国の伝統的な詩歌解読は、主に注釈・詩評・詩話・批点の四つのパターンに分けられるが、『四河入海』はそれらを兼ねた性質を持ち、一種の総合的な注釈体例であることが窺える。

一方で、同一の作者によって書かれたものではなく、四種の注釈書を集めて編者の注釈や案語も付け加えたものである故に、相違する点もあれば、共通している点もある。たとえば、『天下白』、及び『一韓聴書』における引書資料はほかの二書に比べて引用する量も多く、書物の種類の幅も広い点において相違している。それに対して「長篇分段」などの点においては、四書の注釈書において一貫してみられる。瑞渓周鳳は「刻楮子瑞渓脞説叙」におい

て次のように述べている。

長篇分段蓋擬趙次公杜詩之解也。題涉繫詞則摘首尾兩三字、而中間安止一字、蓋王伯大注韓集之例也。義有異論則先舉諸説而至末判其優劣、蓋顔師古注『漢書』之法也。至於未易決是耶非、則故諸説並舉耳。若不可有異論、則惟一義而止矣。或存不善之説、則此亦善資也。或有予臆決、則標刻楮子也。件件觀者辨焉可也（長篇の場合に段落を分ける方法は、思うに趙次公の『（杜詩先後）解』を真似ている。題に繫詞に及べば首尾の二三字を取り出して中間に一字のみを置くのは、思うに王伯大の『朱文公校昌黎先生集』の注の例である。意味の理解に異論があれば先に諸説を挙げて最後に優劣を判断するのは、思うに顔師古の『漢書』注の方法であろう。是非が判断し難い場合には、すなわち諸説を並べるのみである。もし、異論があってはいけない場合は、すなわち唯だ一義のみを採る。或いはよくない説を保留することも、参考の便宜を図っている。或いは自分の判断を示す場合は、すなわち「刻楮子」で提示することとする。こうすれば、読者はそのすべてを分別できるであろう[45]）。

瑞渓周鳳の記述をみれば、中国の代表的な注釈の方法を真似ており、長い作品の場合に段落を分けてその大意を説明し、諸説を並べてその優劣を判断している。また、異説を併存する同時に、独自の見解を先行注釈と混ざらないようにも工夫がみられる。これは『脞説』だけでなく、『天下白』や『一韓聴書』の注釈も概ね同様であり、五山禅僧の蘇詩注釈に共通した特色といえる。

『四河入海』の注釈と中国の注釈は、典拠の注釈の方法において異なる点がある。たとえば中国の蘇詩注釈は概

ね必要な部分だけ引用する傾向がある。それに対して『四河入海』の引用は全体引用の例が多く、史伝と仏教内典の場合は引用が非常に多い。たとえば、『四河入海』巻十一之三の「趙令晏崔白大圖幅徑三丈」詩の題注[47]において、『脞説』は『漁隠叢話後集』巻二十六の『藝苑雌黄』の説の一部を引用しており、その次に『天下白』はもう一回引用してから、「『脞説』不引足『叢話』末、故並記之」と述べ、『藝苑雌黄』の説を全体引用している。また、巻二十三之四の「人日獵城南、會者十人、以身輕一鳥過槍急萬人呼爲韻、得鳥字」詩の第十五句「何似雷將軍」の注において、『天下白』は『新唐書・雷萬春傳』を引用してから、「堯卿注不引足、故以本傳質之[48]」と述べている。これは、『四河入海』が講義録であり、啓蒙的な一面があることを示しているのかも知れない。

また、中国の注釈書にはあまり見えない『四河入海』に特有の注釈の方法として、図録を用いている方法や、蘇詩を和語で解説するという方法、即ち蘇詩国字解[49]を多く用いていることである。

中国の動植物、あるいは器物について、文字から情報を得るばかりでは、なかなか想像し難い。それ故に五山禅僧は、図録や類比の方法で視覚的イメージを創造しているのである。五山禅僧の引用する資料、或いは彼ら自身が作成した図録があり、それは世系図、植物図、器物図、卦図、天文図、地理図の六種類に大別できる。蘇詩に関わる人物が多いため、世系図があれば、人物関係も一目瞭然であろう。『四河入海』では、「范仲淹世系図[50]」「宋朝世系図[51]」「王定国世系図[52]」「蘇氏世系図[53]」「程氏世系図[54]」「禅僧系譜[55]」「東林系譜[56]」「雲門系譜[57]」などが見られる。中国と日本とでは、風土の違いによって相違する植物が多くある。それを説明するために、五山禅僧は『大全本草[58]』を多用しており、稀にその植物図を注釈に入れている。器物について、植物と同じように文字では説明し難いため、「古銅器図[59]」「織錦琁璣図[60]」などの引用が見える。天文や『易』の卦は、図録化して読むと分かりやすくなるため、その引用もよく見られる。天文図の例を挙げれば、「北斗七星之図[61]」「二十八星宿排十二宮図[62]」

などがあり、卦図について随所に見えている[63]。また、地理図については「堯制五服図[64]」などが挙げられる。

蘇詩国字解は、即ち分かりやすい和語で日本の事物を挙げて、中国の事物を解説する方法であり、既知の情報を以て未知の情報を伝える手段で、やや通俗的な嫌いがあるが、読み手にとっては印象的な方法と言えるだろう。なお、蘇詩国語解の具体的な手段としては五点が挙げられる。

A　諺語・俚語の多用
B　実物の日本化
C　人物の類比
D　連歌による異域文学の対話
E　抽象概念の通俗化

五つの手段のいずれも多く用いられ、詳細に分類・分析するには紙幅を費やすため、いまは指摘するに止めて別稿で論じることとしたい。

また、朱・墨点は『四河入海』の重要な要素であり、意味の解釈や異説を併存する特殊な方法としての働きが顕著である。『四河入海』において、「此点可也[65]」「此点甚不可[66]」など評価や「墨点ハ『續翠』之義……朱点ハ北禅之義[67]」などのような異説の併記がよく見られる。中田氏は「古活字版「四河入海」に記入されたる訓点について」において、「訓点の記入と、講抄の口語とが、分かち難い関係であり、講抄の口語は、いかに蘇詩を訓読するかを問題にしている場合が多いからである。朱・墨の訓点について注意しないと、講述抄説明が、一体何を述べて

いるか理解できない結果となってくる。時には全く解意できないのである。そうした意味理解を全く無視して、四河入海の口語資料とするが如きは、学問の堕落というほかはない。[68]」と述べており、『四河入海』訓点の重要性を強調した。また更に、「四河入海においては、朱・墨点の記入のないものは、未完成品であり、それでは、口語抄としても解義できない部分を到るところに生じる。誠に残念極まる。それのみでなく、そうした記入のない古活字版を引用することは、この方面の学問を誤らせる結果になる。朱・墨の記入のない本は、有害である」と言語研究における訓点の重要性を繰り返し警告している。言語研究のみならず、蘇詩研究の領域でも『四河入海』を用いて蘇詩を研究する場合、朱・墨点付きのテキストを用いるべきなのである。

おわりに

以上、蘇詩注釈書としての『四河入海』を蘇詩注釈の歴史的な流れに置いて、その体例や特色を概括的に論じてきた。日本の蘇詩注釈の集大成した『四河入海』はその分量が膨大なだけでなく、一つの体系性を有した注釈理念が備わっている。また、『四河入海』に引用される南宋の旧注は、中国では既に散逸したものが多くあるため輯佚資料としての価値も高い。

また、『四河入海』は四種類の注釈書からなっているのみならず、編纂者の笑雲清三の注釈もある。更にまた、数多くの先行注釈書の引用もある。本稿では、『四河入海』を概説しただけで、『四河入海』の全体を考察するにはまだまだ不充分であることは否めない。『翰苑遺芳』『脞説』『天下白』『一韓聴書』の四書に対する個別研究、及び題注、典故、校勘、詩語・詩句の解釈、訓点、国字解などの細部研究については、今後の課題としたい。

主要参考文献

笑雲清三編、中田祝夫解説『四河入海』、勉誠社、一九七〇～一九七二
孔凡礼『蘇軾詩集』、中華書局、一九八二
劉尚栄『蘇軾著作版本論叢』、巴蜀書社、一九八八
王友勝『蘇詩研究史稿』修訂版、中華書局、二〇一〇
祝尚書『宋人別集叙録』、中華書局、一九九九
顧易生「『蘇軾詩集合注』前言」（黄任軻・朱懐春点校、上海古籍出版社、二〇〇一）
曽棗荘他『蘇軾研究史』、江蘇教育出版社、二〇〇一
向嶋成美・高橋明郎「蘇軾の生涯とその作品集」（『唐宋八大家読本』五、明治書院、二〇〇四年に所収）
小川環樹・倉田淳之助『蘇詩佚注』、一九六五

*1 本稿では、『四河入海』や蘇詩を多く引用するため、その底本を示しておく。『四河入海』については、中田祝夫整理の国立国会図書館所蔵の古木活本のリプリント版を用いる。蘇詩は孔凡礼点校の『蘇軾詩集』（中華書局、一九八二年）とする。引用する際、また、その他のテキストについては、適宜当該箇所に示す。

*2 『四河入海』第十二冊、一〇七一～一一二五頁。

*3 清文堂、一九七一年。

*4 当該書の凡例に「底本は宮内庁書陵部蔵本であるが、後世の補写と思える「巻一之一」及び脱葉と思える「巻十八之三」四二丁一葉は土井忠氏蔵本で補った」とある。

*5 小川環樹・山本和義『蘇東坡詩集』、筑摩書房、第一冊、一九八三年、第二冊、一九八四年、第三冊、一九八六年、第四冊、一九九〇年。

*6 王水照氏は『蘇軾』（上海古籍出版社、一九八一年）の日本語版（山田侑平訳、日中出版、一九八六年）の「自序」及び「蘇軾作品初伝日本考」（『湘潭師範学院学報』（社会科学版）一九九八年〇二期に所収）において、厳紹璗・王曉平は『中国文学在日本』（花城出版社、一九九〇年、第九十二頁）において『四河入海』に言及している。中国で初めて『四河入海』を紹介した論文は池澤滋子氏の「『四河入海』―日本四僧的東坡詩注―」（『宋代文化研究』二〇〇〇年〇〇期に所収）である。

*7 明に生きた散文家の茅坤の次男の茅維は、「旧王本」の内容から体裁に至るまで大きな改竄を加えた。たとえば、元来の二十五巻を三十二巻にしたことや、七十八門類を三十門類に変更したほか、古い注釈を十万余字削除し、注釈者の氏名を変更するなどして、いたずらに「旧王本」本来の姿を失わせてしまったのである。清の康熙三十七年、新安の朱従延は、茅維のテキストを底本にして、類注本を刊行した際に、「酬和」と「酬答」の二類を一類にし、二十九門類とした。これがすなわち『四庫全書』の底本となるテキストで、このテキストが「王本」と呼ばれるものである。旧王本は南宋の注釈者の旧注を多く参照しているため、注釈書としては王本より価値が高い。

*8 『施注蘇詩』は『四庫全書』に著録されており、邵長蘅の注釈は、邵注と呼ばれている。また、清の査慎行は『施注蘇詩』に基づいて、『蘇詩補注』五十巻を編集した。査氏の注釈は査注と呼ばれる。更にまた、清の馮応榴は、類注、施注、邵注、査注を合わせて、『蘇文忠詩合注』五十巻を編集し、馮氏の注釈は、榴案と呼ばれている。この系統のテキストが、合注本と呼ばれるものである。清の王文誥は、合注本に大きな修訂を行い、『蘇文忠公詩編注集成』四十六巻を編集した。王文誥は、各巻の冒頭に「総案」を付しており、特に蘇詩の作詩年代に関する考証を主としている。王文誥の注釈は誥案と呼ばれている。なお、孔凡礼点校の『蘇軾詩集』（中華書局、

一九八二年）は『蘇文忠公詩編注集成』を底本とし、張志烈・馬徳富・周裕楷編『蘇軾全集校注』（河北人民出版社、二〇一〇年）の詩歌の箇所は、孔凡礼氏の『蘇軾詩集』を底本として修訂を加えたものである。岩垂憲徳・釈清潭・久保天随訳註の『蘇東坡全詩集』（国民文庫刊行会、一九三〇年）及び小川環樹・山本和義両氏の『蘇東坡詩集』全四冊（全十六巻）は、合注本系統のテキストを底本とし、黄任軻・朱懐春点校の『蘇軾詩集合注』（上海古籍出版社、二〇〇一年）も同様である。

*9 『四河入海』第一冊、四〇一頁。

*10 『四河入海』第三冊、五三一頁。

*11 『蘇軾詩集』巻三十八。

*12 焦雪は惟肖得巌の「東坡詩抄」を、北禅は瑞渓周鳳の『脞説』を指している。

*13 査慎行『蘇詩補注』巻三十八、四庫本。

*14 『蘇軾詩集』巻十三。『四河入海』第四冊、六八三～六九二頁。

*15 『時代別国語大辞典』室町時代編（四）の解説（室町時代語辞典編集委員会編、三省堂、二〇〇〇年、一七三頁）では、「デマリ」は「デモマレ」の縮約形「デマレ」がさらに変化して由来しており、「デモ」の強調形として口語で用いたが、用例はほぼ抄物文献に限られているという。

*16 『邵氏聞見後録』巻十九、中華書局、一九八三年

*17 『蘇軾詩集』巻三十七。

*18 詳しくは浅見洋二氏の「校勘から生成論へ――宋代の詩文集注釋、特に蘇黄詩注における眞蹟・石刻の活用をめぐって」（『東洋史研究』六十八（一）、二〇〇九年、三四一六九頁）を参照されたい。

*19 『四河入海』では、「本集」或いは「集本」と呼ぶ。用例は第三冊、六二二頁、一〇二四頁、第九冊、六九九頁など、多数ある。

*20 『東坡文集』を以て詩集を校勘する例は、『四河入海』第二冊、八四五頁など、多く見られる。

*21 『四河入海』第一冊、九九〇頁、第三冊、六二二頁など。
*22 『四河入海』第一冊、五八七頁、五九七頁など。
*23 『四河入海』第七冊、九五頁など。
*24 『四河入海』第二冊、二七一頁など。
*25 『四河入海』第六冊、八六一頁など。
*26 『四河入海』第一冊、八〇五頁など。
*27 『四河入海』第一冊、六二頁など。
*28 『四河入海』第九冊、八三五頁、一〇四六頁など。
*29 『四河入海』第七冊、一三〇頁、第八冊、三〇一頁、第九冊、八二頁など。
*30 『四河入海』第七冊、七一一頁など。
*31 『四河入海』第四冊、九六六頁など。
*32 『四河入海』第五冊、七七八頁、第十冊、一四六頁など。
*33 『四河入海』第六冊、二二八頁など。
*34 『四河入海』第十一冊、九頁。
*35 『四河入海』第二冊、八九三頁。
*36 『四河入海』第七冊、二一一頁。
*37 『四河入海』第六冊、九八二頁。
*38 『四河入海』第七冊、九五頁。
*39 『四河入海』第一冊、四六四頁。
*40 『四河入海』第六冊、四八一頁。

*41 『四河入海』第七冊、五八五頁。
*42 『四河入海』第九冊、八六一頁。
*43 『四河入海』第十一冊、九頁。
*44 『四河入海』第一冊、六三頁。
*45 『蘇軾詩集』巻九。
*46 『四河入海』第一冊、六一頁。
*47 『四河入海』第六冊、二三五頁。
*48 『四河入海』第十一冊、八四八頁。
*49 『漢籍国字解全書』（早稲田大学編輯部、早稲田大学出版部、一九二六年、第四～五頁）第一巻の「緒言」に、「国字解」という形の沿革について、「今飜て國字解書濫觴如何と考ふるに、之を推理の上より見れば、我國に漢文の盛に研究せられ且假名文の盛に行はれたる平安時代に於て夙に其萌芽を発したるべき筈なれども、今之を文獻に徴するを得さるが故に鎌倉時代において尼將軍平政子が政務の參考の為に『貞觀政要』の假名文を書かせたるを以て其濫觴と看做さざるを得ず。降りて足利時代に至りては、此類の書、五山僧徒の間に盛に行はれたりと見え、五山抄として傳へらるるものの少からざるが中に、蘇東坡の詩集を講述したる「四河入海」、『史記』を講述したる「史記抄」の如き大部の書籍すらあり。以て其盛況を推すべし。然れども其廣く行はれしは元和偃武以降にあるなり」と述べている。
*50 『四河入海』第一冊、六一一頁。
*51 『四河入海』第五冊、七四二頁。
*52 『四河入海』第五冊、八六三頁。
*53 『四河入海』第二冊、六〇二頁、第九冊、一〇七七頁、第十冊、七七六頁、第十冊、八七八頁。

*54『四河入海』第十冊、八五七頁。
*55『四河入海』第三冊、九頁。
*56『四河入海』第三冊、四八二頁。
*57『四河入海』第三冊、四八六頁。
*58『四河入海』第七冊、五五六頁、第八冊、一〇四～一〇五など、多数ある。
*59『四河入海』第六冊、八一一頁。
*60『四河入海』第十一冊、九六一頁。
*61『四河入海』第十一冊、二九六頁。
*62『四河入海』第十一冊、一〇八〇頁。
*63『四河入海』第二冊、四八〇～四八一頁、第四冊、一〇三七頁など。
*64『四河入海』第一冊、四一七頁。
*65『四河入海』第一冊、八五八頁など。
*66『四河入海』第四冊、二二三頁など。
*67『四河入海』第二冊、三七頁。
*68『四河入海』第十二冊、一一〇二頁。

（筑波大学大学院人文社会科学研究科博士課程）